

令和5年度 中部地区子ども支援net 議事録

日時：令和5年11月10日（金） 13:30 ～ 16:00

場所：奄美市役所5階会議室

参加者：54名（※詳細は別紙）



1. 開会あいさつ

奄美市福祉政策課

課長 麻井 庄二 氏

2. 自己紹介

3. 資料説明及び事業報告

奄美地区地域自立支援協議会（子ども部会、子ども支援net）について



4. ミニ研修

「問題行動の理解～背景の理解と対応～」

鹿児島大大学院臨床心理研究科 准教授 高橋 佳代 氏

支援の主眼は「できる」「わかる」体験

- 同じ診断名がついたとしても、特性のあらわれ方は様々
- 二つ以上の診断基準に該当することも少なくない
- 同じ子どもでも年齢によって異なる診断をされることも

■ 診断名にとらわれず、その子の特性を理解し、子どもにわかりやすい環境で力をつける

■ 失敗体験の積み重ねが一番辛い 「できる」「わかる」体験を主眼に力をつける

A group of people are seated at several tables in a meeting room, participating in a workshop. They are looking towards a screen at the front of the room. The room is well-lit and has a professional atmosphere.

A close-up shot of Kayo Takahashi, a woman with short dark hair, smiling and speaking. Her name 'Kayo Takahashi' is visible in the bottom left corner of the frame.

5. グループワーク

「奄美中部での困り感のある子どもやその家族を支える人たちの連携について」

1グループ【のぞみ園、奄美病院、奄美市教委（ssw）、大島北高、名瀬中、奄美市健康増進課】



・病院に困りごとがあり、相談来院される時、学校で丁寧に聞き取りをされている場合は、治療もうまくいくことが多いが、保護者や子どもに病院受診について、しっかりと説明がされておらず、ただ勧められたような場合だと治療や支援がうまくいかない事がある。

・療育の利用を勧めた場合も、「あまり周囲に知られたくない」という思いから、なかなか繋がらない事もある（地域性もあるように感じる）

・保護者も、周囲にsosを出す事が苦手な世代があるように感じる。ネットで自分で調べたり、直接のやり取りではなく、LINEで保育士に連絡してくるなど、直接的なコミュニケーションが難しいと感じる場面も多い。

⇒子ども達も、学校などで、先生に対して「自分の思いを伝えられない」「相談できない」などの状態が見られることが多いように感じる。

・支援が必要な難しい世帯ほど、周囲に支援してくれる人がいないことが多い。

⇒支援するためには、「まずその世帯を知る事」「知った状況を各相談機関が共有すること」「関係機関を支援者が知ること」が大切

⇒いきなり、精神科などにつなぐより、まずは小児科につないで、保護者の気持ちが切り替わる時間を取った後、必要があれば精神科につなぐようにしたほうがよい。

・親も子ども周りにsosを出す方法を、発達段階に応じて、継続的に支援者が伝え続けていくことが大切。

2グループ【のぞみ園、三環舎、金久保育所、奄美小、奄美市教委（ssw）、奄美市福祉政策課】



・困り感がある子どもが年々増えてきているが保護者が受け入れることができず、療育につなげることに難しさを感じることもある。

・小学校に入ってから、療育の相談に来るケースが多く、幼児期の早い段階でつなげられるように、チームとして支援できる体制が必要。

・行動面で何につまずいているのか、見極めることが難しいこともある。

・5歳児健診を行ってほしい。

・様々な職種の方と顔を合わせて話す機会ができて非常に良かった。

3グループ【にこびあ、あんだんて、奄美中央病院、平田保育所、奄美市教委（ssw）】



- ・以前は、他機関と一方通行の話が多かったが、最近はコミュニケーションが取りやすくなったと感じている。
- ・制度が変わったことで連携が取りやすくなった。
- ・民間で取り組んできたことで制度も変わってきたのではないか。
- ・子どものタイプも変わってきた。以前は、発達障がいが多かったが、最近は愛着障がいの傾向が強い子どもも増えてきている。
- ・保護者の傾向も変わってきている。スマホなどで自分で情報を得ることも多い。良い部分もあるが、支援者の関りも変えていく必要がある。
- ・各機関同士がと繋がっていくことで、情報共有も行うことができる。
- ・病院も相談が多く、対応できないケースもある。そのままにせず、相談会や情報提供を行うようにしている。また学校や他の機関につなげる活動を行っている。
- ・学校などにつなげる方法について考えたが、事例検討よりも、今回のような「顔の見えるネットワークづくり」が大切だと改めて感じる機会になった。

4グループ【三環舎、ここ、名瀬信愛幼稚園、奄美市教委（ssw）、奄美市教委】



- ・中学校の不登校については、幼児期から検診などで声をかけられていたが、療育などに繋がらず、中学になってから困り感が出てくることも多い。
- ・保護者に会うことも難しく、会えても、理解してもらうこと、その先のことも伝えるのが難しいと感じている。
- ・本日の研修でもあったが、子ども自身が安心できる環境を準備することが大切（大人、支援者、教員の配慮も大切）
- ・不登校児を持つ、保護者の会などがあれば思いや悩みを共有できるのではないか。
- ・就学前に、保護者の理解が大切。困り感のあるなしに関わらず、支援学級に対して理解していただく機会を作ることが必要。その上で、地域の保健師などとやり取りを継続していくことも大切。
- ・だいぶ組織化され、偏見も減ってきているが、祖父母の理解も含め地域の偏見を失くしていく取り組みも必要。
- ・地域全体で、子どもが主役で、子どもが育ち、良い大人になって、社会の一員として、役に立つように人間に育てていけたらよい。

5グループ【あかな、あすなる、春日保育所、奄美市教委（ssw）、大島教育事務所、瀬戸内町保健福祉課】



- ・保護者と連携を取っていくために、支援の必要な子どもがいる保護者への伝え方や、理解を得るための手法などを学ぶ機会が必要
- ・事業所も増えているため、並行通園している場合の連携の回り方や、支援の必要な子どもさんをつなげるタイミングなどについて学ぶ機会があればよい。
- ・支援者も子どもへの対応で、2次障害を引き起こさないような関わりを学ぶ機会が必要だと感じる。
- ・支援者、保護者、どちらも含めた勉強会の企画を行ってほしい。

6グループ【のぞみ園、あすなる、名瀬信愛幼稚園、大川中、奄美市教委（ssw）、龍郷町子ども子育て応援課】



- ・「家族支援」「保護者支援」に関する意見が多く出された。
- ・療育機関、教育機関、保健師などそれぞれがつながり、保護者への支援を行っていく必要がある。各機関同士の「横のつながり」と、幼、保、小、中、高など保育教育機関の「縦のつながり」を意識しながら子ども自身にとって良い環境を作っていけたら、生きづらさの軽減につながるのではないかと。

7グループ【かがやき、はごろもの郷、春日保育所、奄美病院、奄美市教委（ssw）、龍郷町子ども子育て応援課】



- ・保護者への伝え方や考え方の違いなどで困る事もある。早期療育への繋ぎに力を入れていくことも大切。
- ・不登校が多いが、地域に専門的に対応できる人材が少ない。地域として確保することは地域課題である。
- ・不登校で、家庭が安心できる場所であればよい。他にも本人が安心できる場所を確保することが大切。
- ・子ども自身や保護者が安心して療育を利用できるように、申請書から「障害」の文字を省くことはできないか。

8グループ【ていだ（相支援）、ハートリ八龍郷、小宿保育所、緑ヶ丘小、奄美市教委（ssw）、瀬戸内町保健福祉課】



- ・保護者や関係機関がどのようになっていくかが大切。
 - ・母親と会うことは出来るが、家には来てほしくないというケースがある。心の教室などに誘うが本人が来れない場合、支援ができず、心配である。
 - ・タブレット学習なども進んでいるため、家庭でも、利用できるように環境を作ることも大切。
 - ・大規模な学校で不登校だった子どもが、小規模校に転校して、毎日通えるようになった事例もある。
 - ・学校で対応できない場合、行政が、スクールソーシャルワーカーなどと連携し対応しているところもある。
 - ・ネグレクトの疑いがるケースでは、保護者と個人面談の機会をつくり、寄り添いながら対応している。
 - ・wisc-IVを受けたことで、特性が分かり、本人への支援や関わり方が分かったので良かった。
- ⇒就学前の児童が検査を受けやすくなったことで、療育にもつなぎやすくなった。
- ・現在、不登校の児童や学生に対しても「早い段階で支援できていたら」という思いが強い。早い段階での検査を促し、幅広い支援が受けられるようにしていけたら良い。

9グループ【はごろもの郷、大島特別支援学校、奄美市教委（ssw）、名瀬保健所、瀬戸内町保険福祉課】



- ・保護者と関係機関がつながるまでが難しい。家庭で困り感が見えにくい場合は特に難しく感じる。
- ・保護者も「子どもらしくていい」という考え方の方もいる。
- ・園や学校の授業参観などで、家庭の様子との違いを見てもらい、気づきにつなげていくことが大切。
- ・発達クリニックで小児科のDrに相談するのはハードルが高い。普段通っている主治医と連携する体制づくりが出来たらよい。
- ・事業所に利用について、困り感が改善されたら終了するという目標を伝えると、気楽なスタンスで利用できるのではないかと。

【感想・意見】

- ・どのテーブルでも不登校の話題が上っていた。
- ・今は、無理に学校に引っ張っていく時代ではない。親支援を意識しながら、悩みを持っている子どもや保護者を孤立させないように取り組んでいくことが大切。
- ・学校だけでは解決できない課題も増えてきている、様々な機関の大人が連携しながら、たくさんの視点で子ども達を見て、支援していくことが大切。